

新しい展示施設の 愛称を募集します



外観は白色を基調とした、明るい施設となります。隣接する現郷土館とのバランスを取った配色になります。

これまで長らく親しまれてきた郷土館は、9月1日から一時休館となります。現在、隣接する食材供給施設を新しい展示施設として整備しています。今後の開館に合わせ、新しい施設の「愛称」を募集します。

釧路湿原国立公園内に所在する、唯一の展示施設にふさわしい愛称をぜひご応募ください。採用された方には、当館オリジナルの粗品をお送りします。

- 応募方法**／必要事項を記入して、メール・FAX・ハガキなどで応募してください。
- 必要事項**／愛称、愛称の理由、住所、氏名、電話番号
- 締め切り**／10月13日(金)
- 応募先**／郷土館
 - ・住所…川上郡標茶町字塘路1番地
 - ・FAX…487-2364
 - ・メールアドレス…kyodokan@sip.or.jp

1階の旧レストラン空間は、来館者の学習の場や、ゆったりとくつろげる休憩空間としても使えます。



大川のほとり

—郷土館だより(第75号)—
☎487-2332



標茶・近世近代人物誌 第一話



(兄弟の譲り合い)

ケンルカウスとエラマオイ (後編)

- ・ケンルカウス(生没年不明)
- ・エラマオイ(生年1811年ごろ～没年不明)

(前回のあらすじ) 松浦武四郎が聞き取った、兄ケンルカウスと弟エラマオイの逸話。塘路コタンを治める長が亡くなり、釧路会所はケンルカウスに跡を継ぐよう命じましたが、ケンルカウスは亡くなった長の養子となっていた実の弟エラマオイに役職を譲りたいと伝え、2人はお互いに固辞し、最後はくじ引きでエラマオイに決まったのでした。

松浦武四郎は安政5年(1858年)に行われた蝦夷地調査で塘路へ立ち寄り1泊しました。この調査で武四郎は標茶・塘路付近の道案内を、ケンルカウスにお願いしています。武四郎は塘路コタンで、当時住んでいた人々の戸数と個人名を記録しました。エラマオイは当時40歳で、サンシロウ(三四郎)という日本語名を持ち、逸話通り塘路コタンで「小使」という役職を務めていました。ケンルカウスもエラマオイも、妻や息子たちと一緒に暮らしていたことが記録されています。

興味深いのは武四郎が、この兄弟と思われる人の聞き取りを虹別で書き記していることです。記録によれば「アッコツナイ(現在の中虹別付近)」という川のそばに、番屋と多くのアイヌの人々の家があり人が住んでいた。そのうちイコンレコツとハウキウエンコの住む2軒は、最近まで人がいたが死んでしまい、今は家が絶えている。その子孫は存命で、ケウカウシ、イラマウエ、ハルコ(女の子)。3人とも今はトウロにいる」といった内容が記されています。トウロへ行ったとされるケウカウシとイラマウエ、

地元

の人は

不定期コラム

コレを見たい…

第4回

釧根を取り上げた作品たち(映像編)

郷土館職員が、北海道や標茶が登場する「映像作品」を紹介します！

まんが日本昔ばなし第291話 「トーロコのペカンベ」

～「昔、北海道の塘路湖という湖のほとりに、
アイヌのコタンがあった。コタンと言うのは村の事じゃ」～

今回は本から離れ、映像作品を紹介します。

「まんが日本昔ばなし」は昭和50年から放送を開始し、長らく人気を博したアニメ作品です。タイトルを聞いてすぐに市原悦子さんの声を思い出す人も多いでしょう。竜の背中に男の子が乗っているオープニングはとても有名です。その「まんが日本昔ばなし」全1,474作品の1つとして、塘路湖に伝わる物語を題材に「トーロコのペカンベ」は作られました。現在では諸事情により、放送されることが難しくなっており、見たことのある方は少ないかと思います。

原作となった「トーロコのペカンベ」が収録されている本「父・母が語る日本の民話」は、図書館で借りることができます。著者の和田義雄による叙情的な話となっており、地域の昔話として楽しめる内容です。

～郷土館で博物館実習が行われました～

実習を終えて

東海大学生物学部生物学科4年生
高橋 優花

私は学芸員資格を取得するため、6日間郷土館で実習させていただきました。実習初日はとても緊張しましたが、職員の皆さんに温かく接していただいたことが励みになり、集中して実習を行うことができました。実習の中で行事の配布資料の作成や寄贈された本の整理など、さまざまな作業を行いました。「こんなことまでするんだなあ」と毎日思うほどやるのがたくさんあったので、時間が過ぎるのがとても早く感じました。また、大学の講義や本の知識では得られないような経験をたくさんし、充実した6日間を送ることができました。

最後になりますが、郷土館職員の皆さん、忙しい時期に実習を受け入れていただきありがとうございます。短い間でしたがお世話になりました。



塘路コタンの住人ケンルカウスとエラマオイは語感が似ています。もしこの2人が同一人物だったのであれば、2人にはハルコという妹がいて、虹別とも繋がりのある家系だったことが分かります。

その後の記録として「標茶町史考前篇」では、塘路アイヌの個人名を記した文献として明治17年の「旧土人救済書類」、明治28年の「北海道釧路国川上郡塘路村旧土人惣人別」が紹介されていますが、それらの中にケンルカウスやエラマオイを含めた一族の名前は見当たりません。明治17年は、武四郎が塘路を訪れてから26年が経過しており、ケンルカウス兄弟は60歳代後半の年齢に当たります。明治維新を迎え「蝦夷」が「北海道」へと変わるなど情勢が変化する中で、2人がどのような人生を過ごし、そして終わりを迎えたのか、記録から読み取ることはできません。

武四郎が塘路へ来た際に記録したコタンに住む人々の名前の中には、後に塘路コタンの長として活躍した有力者の名前も見られます。世代が変わる中、塘路コタンに暮らす人々の状況も変わっていったのでしょう。(完)